

やきものには、「刀で彫る」「筆で絵を描く」
「釉うわぐすりを流しかける」「型を貼り付ける」「スタ
ンプを押す」といったように、さまざまな装飾
方法があります。なかでも金と銀による装飾は
器うつわを輝かせ、たいへん華やかです。

ここでは世界に先駆けて製陶を行なった中国
の作例や、金銀彩とは異なるものの、酸化銅や
酸化銀を含んだ顔料を用いて器面を金属的に輝
かせるイスラームの作例、そして陶器・磁器、さまざ
まな素地そじにあわせて金銀彩の表現を工夫した日本の作
例を紹介します。

異なる地域、時代の作品を比較してみることで、金銀彩を通
して日本のやきもの文化の豊かさ、独自性を再認識することがで
きるでしょう。

特集

やきものを

彩る金

と銀

Thematic Exhibition
The Spectacular Luster of
Gold and Silver Ceramics

2024 10/22(火)~12/1(日)

東京国立博物館 本館 14 室

This thematic exhibition features ceramics decorated with gold and silver sheen. On display are works from China, where porcelain was first produced in the world, and works of Islamic porcelain, which used oxidized copper and silver as coloring agents to create a lustrous, metallic shine on the surface. Also on view are gold- and silver-decorated Japanese porcelain and stoneware, which have continued to progress with evolving methods since the 1600s. Through these works, you can come to appreciate the unique and profound qualities of Japanese ceramics.

中国の金銀彩

中国では宋時代の名窯の一つ、華北の定窯の作例に金と銀の装飾がほどこされたものを見ることが出来ます。その後、銀彩は姿を消しますが、元から明時代にかけて磁器生産で台頭した江西省の景德鎮窯において、金彩が積極的に行なわれました。接着剤を用いて箔を置き、焼き付ける方法が主流であったと考えられますが、なかには筆を使って金泥をほどこしたと推測されるものもあり、具体的な技法は詳らかではありません。いずれにしても剥落しやすいのが難点でしたが、19世紀になるとヨーロッパから金液が伝えられ、安定した金彩表現が可能となりました。

宋～元時代



柿釉金銀彩牡丹文碗
Bowl with Peonies

中国 定窯 北宋時代・11～12世紀
伝中国陝西省榆林出土
井上恒一氏・富美子氏寄贈 TG-2920

金彩で牡丹をあらわし、口縁を銀彩で彩った碗。実用品というより、上流階級者向けの装飾的な贈答品であったと考えられます。



金彩文字天目
Tenmoku Tea Bowl with Gold Characters

中国 南宋～元時代・13～14世紀 TG-581

福建省で焼かれた黒釉碗。「寿山福海」という吉祥文字の周囲に細い線を連ねた様子は、禾目天目を写しているようです。

明時代



五彩金欄手碗 (6客のうち)
Bowl

中国 景德鎮窯
明時代・16世紀 TG-2177

五彩金欄手花卉文水滴
Water Dropper with Flowering Plants

中国 景德鎮窯 明時代・16世紀
若州酒井家伝来 広田松繁氏寄贈 TG-2529

日本では中国の高価な織物である金欄にたとえて「金欄手」と呼び、珍重されました。赤色の地に金彩が主文様として用いられています。



三彩金欄手龍濤文水注
Water Pitcher with Dragons and Waves

中国 景德鎮窯 明時代・16世紀 TG-2967

16世紀、嘉靖年間の頃に景德鎮の民窯で焼かれた金彩の器。中国史上最も繁栄したといわれる明王朝を象徴するように煌びやかです。



金属的な輝きをもとめて

金彩や銀彩ではありませんが、金属的な輝きを放つやきものがあります。

たとえば福建省の建窯で焼かれた曜変天目、油滴天目、禾目天目。これらの銀色や七色の不思議な文様は、焼成中に生じた偶発的な科学変化によって生じたと考えられています。一方、ラスター彩は酸化銀や酸化銅を含んだ顔料で絵付けしたもので、金銀器の使用が制限されたイスラームを象徴するやきものです。金銀器の姿かたちを倣い、創意工夫をつづけて進化してきたやきものの歴史を垣間見るようです。

禾目天目
Tenmoku Tea Bowl with a "Hare's-Fur" Glaze

中国 建窯 南宋時代・12～13世紀
広田松繁氏寄贈 TG-2496

日本でも喫茶碗として人気を博した天目。釉中にあらわれた銀色の幾筋もの細い線は、中国では兔の毛にたとえられます。



ラスター彩騎馬人物文壺
Jar with Figures on Horseback

イラン、カーシャーン ホラズム・シャー朝
1170年代末～1200年頃 TG-3067

現在のイラン北東部を中心に12世紀頃に本格化したラスター彩。黄色や赤色を帯びた独特の発色で、金銀彩よりも安定しています。



清時代

金彩、銀彩
じゃない!?

五彩人物文大皿
Large Dish with Figures

中国 景德鎮窯 清時代・17～18世紀
広田松繁氏寄贈 TG-2624

ヨーロッパ輸出向けの大皿。明時代の力強く煌びやかな金欄手とは異なり、清朝の金彩は細く華奢な筆遣いで、ほかの上絵具と一体となって見えます。



日本の金銀彩

— 伊万里と京焼

京焼

日本では17世紀後半、九州の有田（伊万里焼）と京都（仁清）において上絵付けの色絵が始まるとほぼ同時に金銀彩がほどこされるようになります。象牙色をした陶器である仁清の場合、文様のモチーフごとに厚薄の表現を使い分ける工夫がみられ、つづく18世紀の乾山焼では金粉を蒔いた砂子やぼかしのほか、あえて輝きをおさえる寂びた表現など、さらに進化した様子を見てとることができます。この京焼における金銀彩はその後、幕末、明治へと継承されていきました。

一方、磁器生産を牽引した伊万里焼でも17世紀後半の一時期、金と銀を用いており、とくに銀彩だけをほどこす特殊な例も見られます。ただし硫化によって黒く変色するのを嫌ったためか、その後、有田では中国同様、銀彩を採用することはほとんどありませんでした。



いろえげつばいずちやつぽ
◎色絵月梅図茶壺

Jar for Tea Leaves with the Moon and Plum Blossoms

仁清 江戸時代・17世紀 G-40

京焼の色絵大成者とされる仁清の作。量感豊かな梅樹に調和させるように、金銀の花卉や月は厚く、一方で源氏雲は小さな箔を重ねたように描き分けています。



伊万里

るりじきんぎんさいさんすいすどくり
瑠璃地金銀彩山水図徳利

Sake Bottle with a Landscape
伊万里 江戸時代・17世紀 G-5044

有田では17世紀後半のヨーロッパ輸出向けや国内向けの製品に金銀彩を積極的にほどこしました。本作のように銀彩を中心に用いたものはきわめて珍しいものです。



いろえつばいずこうごう
色絵椿図香合

Incense Container with Camellias

乾山 江戸時代・18世紀 広田松繁氏寄贈 G-5363

尾形光琳の弟、深省（1663～1743）は乾山焼において仁清に倣い、土や釉の開発に力を入れます。金銀彩も積極的に採用し、素地を活かした巧みな表現を行ないました。

蓋裏

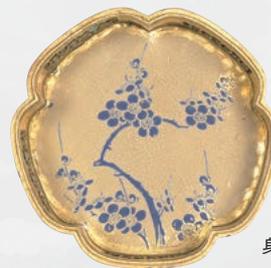


いろえあらいそもんはち
色絵荒磯文鉢

Bowls with Rough Waves

伊万里 江戸時代・17～18世紀 G-5851

明の嘉靖金襴手の人気を受けて、有田では国内向けのいわゆる「元禄金襴手」が焼かれました。よく見ると、金彩の表現は景德鎮窯のものとはだいぶ異なります。



身の内部

いろえつばいしょうちくばいもんすかしりじゅうふたもの
色絵椿松竹梅文透入重蓋物

Stacked Food Boxes with Camellias, Pines, Bamboo, and a Blooming Plum Tree

京焼 江戸時代・18世紀 G-41

青と緑の上絵付けに金彩を添えた独特の色彩が特徴的な京焼の「古清水」。透かしが入った複雑な器形と、華やかな松の文様が見事です。



永樂和全の 金銀彩



えいらくわぜん
永樂和全 (1823~96) は、京都で代々、土風炉や
やきものの制作をつづける千家十職の一つ、永樂善
五郎家の12代です。幕末から明治にかけて活躍し、
京都のほか現在の石川県九谷でも作陶を行ない、陶
胎に布目で文様をあらわした独特の技法や、中国磁
器に倣った金襴手を得意としました。

いろ えしつほうもんはいせん 色絵七宝文盃洗

Bowl for Washing Sake Cups with
Linked Circles

永樂和全作 江戸~明治時代・19世紀
横河民輔氏寄贈 G-1077

和全はとくに素地の特徴を活かした銀彩の表現に長け
ており、仁清や乾山以来の京焼の伝統を感じさせます。



いろ え えがわりしやうかくざら 色絵絵替小角皿

Set of Small Square Dishes

永樂和全作 江戸~明治時代・19世紀 G-158

古清水風の伝統的な青と緑を基調とした絵付けです
が、布目文様と輝きをおさえた金銀彩に、和全ならで
はの表現をみることができます。

近代の金襴手

幕末から明治にかけて、万国博覧会への参加を目指して
日本は国を挙げて殖産興業を進めます。海外輸出向けの
やきものづくりも活発化し、明治26年(1893)のシカゴ・
コロンブス世界博覧会では、明治政府は出品に向け
て伝統的、かつ超絶技巧の作品を求めました。

いろ え きんらん で ほうおうもんがざりつぽ 色絵金襴手鳳凰文飾壺

Jar with a Pair of Phoenixes

七代錦光山宗兵衛作 明治25年(1892)
シカゴ・コロンブス世界博覧会事務局寄贈 G-125

錦光山宗兵衛は代々京都の粟田口でやきも
のを手がけた窯元。七代宗兵衛(1868~
1927)は、伝統的な京焼に繊細優美な薩摩
錦手の技法や表現をとり入れました。

いろ え きんらん で りゅうこ ざたいへい 色絵金襴手龍虎図大瓶

Large Vase with a Dragon and a Tiger

竹内吟秋作 明治25年(1892)
シカゴ・コロンブス世界博覧会事務局寄贈 G-136

竹内吟秋(1831~1913)は、有田など各地
で窯業指導にあたったゴットフリート・ワグネルに
師事し、近代九谷焼を牽引しました。



※本書の内容は、科学研究費若手研究
「日本陶磁における金銀彩の特殊性について」
(研究課題/領域番号:19K13017、
研究代表者・三笠景子)の研究成果に基づくものです。

◎は重要文化財

表紙作品: あからくしまだいちゃん 赤楽島台茶碗

旦入作 江戸時代・19世紀
横河民輔氏寄贈 G-1098



特集 やきものを彩る金と銀 令和6年(2024)10月22日発行



執筆:三笠景子 撮影:藤瀬雄輔ほか 翻訳:サミュエル・タン(以上、東京国立博物館)
デザイン・制作・印刷:能登印刷株式会社 編集・発行:東京国立博物館 ©2024 東京国立博物館 Tokyo National Museum